

清泉の「キリスト教ヒューマニズム」 誕生の経緯をめぐって

— J . H . ニューマン — + 田中耕太郎 + 内山八寿子 —

清泉女子大学史料室特別顧問

有光 隆司

はじめに

『清泉女子大学規程集』と「キリスト教ヒューマニズム」

学校法人清泉女子大学寄附行為（『清泉女子大学規程集』）

昭和48年4月1日(1973)施行

附 則 1

この法人の設立当初の役員は、次のとおりとする。

理事（理事長） 荻島 愛子* Sr.メレスデス・ルイスの後任

理事 内山 八寿子

理事 庄子 房子

理事 石田 加都雄

理事 江尻 進

理事 水田 直昌

理事 栗山 百合子

理事 松本 正夫

監事 宗像 英二

監事 岩浅 武雄

附 則 2

この寄附行為は、昭和48年4月1日より施行する。

第1章 総則

(名称)

第1条 この法人は、学校法人清泉女子大学と称する。

(事務所)

第2条 この法人は、事務所を東京都品川区東五反田3丁目16番21号に置く。

第2章 目的及び事業

(目的)

第3条 この法人は、キリスト教の精神に基づき、教育基本法及び学校教育法に従い学校教育を行なうことを目的とする

本年度の『清泉女子大学規程集』 清泉女子大学学則

第1章

総則

第1条 本学は、教育基本法及び学校教育法に準拠し、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、**キリスト教的世界観**に立ち、高い知性と豊かな教養をそなえ、奉仕的精神に富む女性を養成することを目的とする。

1 総合文化学部 人文科学の諸分野に関する幅広い知識を基盤として人間の尊厳や文化の多様性を深く理解し、人間愛の立場から自律的に社会貢献し、国際的に活躍できる人材を育成する。また、建学の精神である「キリスト教ヒューマニズム」を基盤とし、人文科学の見地から「人間とは何か」を追究することを通して、幅広い教養と専門分野の知識を修得させる。多様な文化のあり方を理解することで、他者を尊重し、協働できる姿勢を涵養する。

総合文化学科 人文科学の広範な知識によって自己を取り巻く世界を的確に理解し、深い洞察力に基づいて判断・行動できる人材を育成する。文化の多面性を理解し、他者を尊重する姿勢を身につけることによって、国際社会に貢献できる人材を育成する。

2 地球市民学部 人間愛の尊重を基盤に、文化の多様性を理解し、グローバル社会の諸事象を分析できる人材を育成する。数多く存在する社会課題のなかから、自分に取り組むべき身近な問題を定めて、その課題解決のために、他者と協働しながら具体的に行動することができる人材を育成する。また、建学の精神である「キリスト教ヒューマニズム」を基礎に、文化や社会の多面性を尊重しながら、社会課題を解決するために探求する力を涵養する。幅広い教養、専門分野の知識に加え、理想の実現に向けて具体的に実践する行動力を修得させる。

最終改正：令和7年4月1日

『財團法人寄附行為』財團法人 清泉寮

昭和26(1951)年2月21日

第壹章 目的及事業

第一條 本法人ハ女子ニ對シ學術技藝ヲ授ケ婦徳ノ涵養ヲナスコトヲ以テ目的トス

第二條 前條ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ
清泉寮學院ノ維持經營

第四條 本法人ハ事務所ヲ東京都澁谷區代々木初台町
四七六ニ置ク

第四條 本法人ハ事務所ヲ東京都澁谷區代々木初台町
四七六ニ置ク

現役員住所

田中耕太郎（理事長）最高裁判所長官公邸

土井辰雄（理事）文京区関口台町十九

大木吉章（理事）

エルネスティナ、ラマリヨ（理事）澁谷區代々木初台
町四七六

カルメン、ウスタラ、バサベ（理事）横須賀市稲岡町

戸川啓一（監事）上智大學構内

I

**それでは記録上、本学において
「キリスト教ヒューマニズム」という用語は
いつの出現するのか？**

本学における「キリスト教ヒューマニズム」 という用語の出現＝1967(昭和42)年

「建学の精神 今と昔」 学長 内山八寿子
『清泉女子大学学生新聞』第40号 1972(昭和47)年11月7日

* 清泉女子大学第3代学長(1967年4月～1973年3月)

近代日本の先覚者を創立者とし長い伝統を誇る有名私立大学ではそれぞれ独自の教育理念を揚げた「建学の精神」がその教育のバックボーンになっているのは周知の事実であるが、そのような大学においても、マスプロ化したキャンパスに学ぶ大多数の学生にとっては、その「建学の精神」が全く無縁のものになりつつあると嘆かれています。

戦後、新制大学としてはじめて発足した、比較的歴史の浅い本学の事情はこれと多少異なる。在学生総数が三百名前後で、教員と学生の比率が一对五にも充たず、少数教育に徹していた創立期には、殊更に建学の精神をあげつらうこともなく、教師と学生達は不文律の建学の精神を自づと体得していったのではないかと思う。

昭和三十七年の東京移転に伴い、その後、学生数が年々急速に増加するにつれて、建学の精神を全学生に徹底させる必要が次第に痛感させられるようになり、「キリスト教的世界観に立ち、高い知性と豊かな教養をそなえ、奉仕的精神に富む女性を養成する」と学則第一条に明記されている本学創立の目的と、「神のみ前に、清く、正しく、愛深く」との清泉の教育のモットーをあわせて解説した、「建学の精神」と題するパンフレットを新入生に配布するようになったのは、昭和四十二年のことであったと記憶する。

しかし、当時の在學生には、印刷された「建学の精神に頼らず、卒業生や上級生から継承された伝統的な清泉女子大生のスピリットを身を以て生きていた人々が多くいて、新入生に少なからぬ感化を与えたようである。

その後につづく二、三年は、全国的に多くの大学を襲った学園紛争の余波は本学にも及び、紛争こそ免れたとはいえ、教師と学生、上級生と下級生との間に、かつて存在しなかった断絶感が生まれ伝統的な建学の精神の継承も断ちきられたようにみえた。

だがそれは、伝統的な建学の精神に新しい光をあて、時代に適応する新しい解釈を試みる摂理的な機会でもあった。

なぜなら、キリスト教ヒューマニズムに基く人格形成を施し、正しい人生観と奉仕約な精神の持ち主を社会におくるという建学の根本的な精神は不変であっても、その具体化である実際的な教育方針は時代の変遷や状況の変化に応じて変わり得るし、変わらねばならないものだからである。

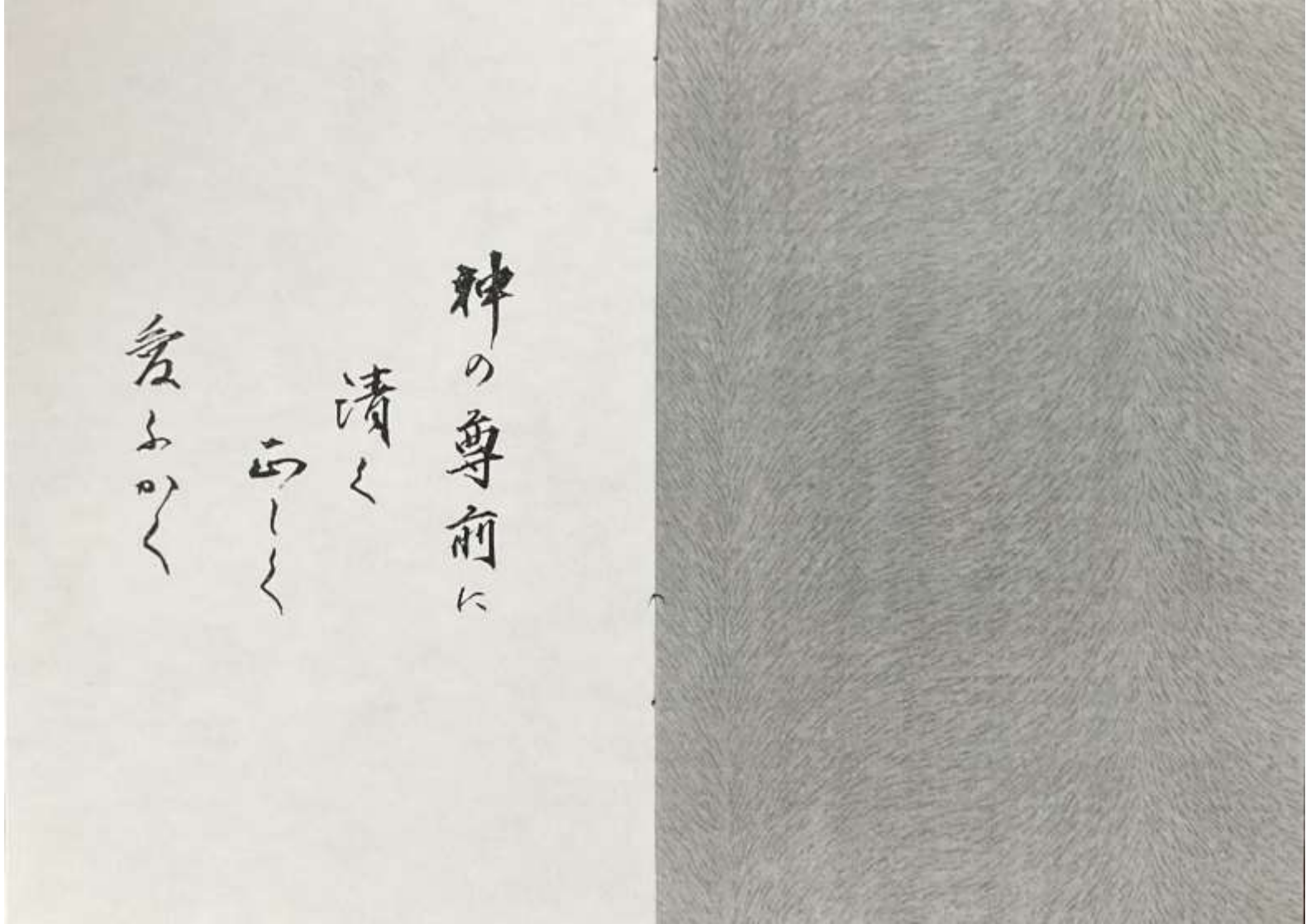
「ゆりかごを動かす子は世界を動かす」との確信に基いて、すぐれた家庭婦人を育成することに大きな社会的意義を認めた創立期の教育方針も、キリストの教えた人類愛、人間の社会的連帯性の自覚に基いて、万人の幸福を願い、理想的な社会の実現のため積極的な協力をなすべき使命を強調した近年のそれも、何れも同一の建学の精神の時代に応じた異った適用に他ならなかった。

さて、この建学の精神が、現在清泉に学ぶ若い人々のうちにどのように活かされるべきか、これがいま、全学生に与えられている大きな課題である。

学生のひとりひとりが、自己中心の狭い視野から抜け出て、ひとたび広く眼を世界に向けるならば、過度の物質文化と技術文明の支配の下に呻吟する人類の苦悩が眼に映ずることであろう。この世界の解放のため、清泉女子大生が寄与する道はないであろうか、新しい時のしるしを鋭敏に把握するという、青年にだけゆるされた特権を正しく行使して、理想の社会の建設のために協力することができるのは、人格をばすべての価値に優先させて尊重する、キリスト教ヒューマニズムの精神に生きる人々ではなかろうか。

清泉女子大学

建学の精神

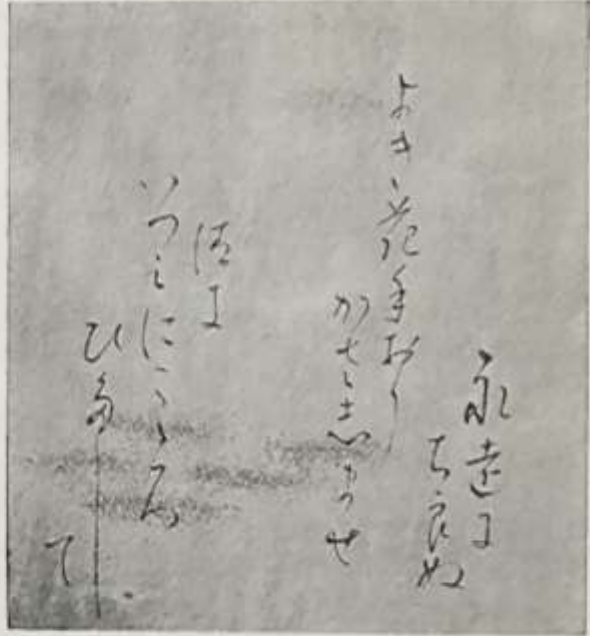


神の尊前に

清く

愛ふりく

愛ふりく



校歌 佐々木信編作詞

建学の精神

創立の目的

清泉女子大学はカトリック聖心待女修道会を母体とする学校法人清泉女学院により、日本女性にキリスト教ヒューマニズムに基く人格形成を施し、正しい人生観と奉仕的な精神の持主を社会におくことを目的として、昭和二十五年四月神奈川県横浜須賀町に創立されました。

学則第一章第一条

「……キリスト教的世界観に立ち、高い知性と豊かな教養をそなえ、奉仕的精神に富む女性を養成することを目的とする」

本学教育の特色

- 一、キリスト教ヒューマニズムに基く人格形成
- 一、正しい学問的態度を通じて人格的主体性の確立
- 一、共同体的精神の実践
- 一、社会的、国際的使命の自覚

本学の教育の基本的原理

キリスト教ヒューマニズムの教えるもの

- 一、絶対者との関係
——永遠とのつながり——
人間をこえる絶対者の存在をみとめ、この絶対者と、相対的な有限の存在である自己との関係を自覚して生きる。

- 一、人格の尊重
すべての人間を人格として一切の差別なく一様に尊重する。
- 一、人類愛
人類はみな神を父とするきょうだいであるから互に愛し合う義務がある。

モットーの解説

キリスト教ヒューマニズムによれば、人間は先ず神と隣人とに対する自己の正しい関係を自覚し、この自覚に基いて、すべての行動を営むこととなります。

「神の御前に清く」

神という絶対者に依存する相対的な有限な存在という、自分の分をわきまえて、創造者なる神を畏敬することは、人間の根本的な態度ですが、この無限な神とのつながりを自覚することは、人間をして自己の有限性をこえて、永遠のために生きることを可能にさせます。

日夜、神の前に反省しつつ、正しい良心を形成し、己れを求めず、眼前の利害を尺度とせず、常に純粋な高尚な動機で行動すれば、永遠に朽ちない徳の冠を得るであろうことは、校歌の歌う通りです。

清泉の学生には、この精神的態度が、女性の品位にふさわしい言動となってあらわれることが望まれます。服装その他の規定はこの実行を容易にするために定められています。

「正しく」

モットーの後半は、人間が神から与えられた社会的使命を達成するのに必要な心構えを示しています。

人間の真の価値は身分、才能をこえた人間性の尊重にあります。従って私どもはお互の人格を認め、その権利を尊重し、またそのために各自の義務を忠実に果たさねばなりません。

つまり人間はみな、その生命を保ちながら人間としての完成に必要なすべての手段を用いる権利と義務を持っているのですから、持てる者は持たぬ者に与えて、この権利と義務の実現を可能にすることこそ社会正義です。しかし、現実の社会にこの正義が実現するためには、各自が自己の権利を主張するよりも、他人の権利を尊重し、堅忍、責任感、社会的運籌感、共同善に積極的に奉仕する精神などを以て、協力する事が求められます。

社会正義の要求を愛の精神によって、果たす時、初めて幸福な社会が実現します。愛とは献身的な奉仕の精神と言いかえることができますが、この精神こそ人格的共同体を支えるものであり、また真の人格完成は共同体的生活の場で、愛を体験し、愛を実行することによって得られるものです。

家庭的な交わりを以て結ばれる大学共同体であることを理想として、この精神の実現につとめているからです。

また、ここから、自分の身近な人々や社会にその愛を限らず人類全体を神を父とする一つの家族を見て、人種、民族、階級、職業の差別なく、すべての人々をきょうだいとして愛し、人類共存のため、世界の平和のために奉仕、協力する精神が生まれます。

清泉女子大生の使命

清泉の学生には、すべての人が一切の差別なく人格として尊重され、人間としての正当な幸福を享受することができる社会がこの地上に実現する日をめざし、社会正義の要求に愛の精神を以てこたえ、社会のひずみに苦しむ人々の困難をやわらげ、世界の平和の回復のために働くなど、社会のために積極的に献身率仕する使命が与えられています。

この尊い使命をより良く果たすことができるため、常に新しい問題意識と熱心な研究意欲を以て、真理を探究するという正しい学問的態度を通じて自分で考え、反省する力を養い、徒らな印象や感情の刺激によって動かされず冷静に客観的に物事を判断し、自主的に行動できる主体性を身につけ、学会、学生会などの課外活動を通じて共同体的精神をつちかい、学期、規則の遵守によって、本学の誇りある伝統にしたがった気品ある女性となることが求められます。

清泉女子大学

建学の精神

神の尊前に／清く／正しく／愛深く

校歌 佐々木信綱作詞

建学の精神 p.1

創立の目的

清泉女子大学はカトリック聖心侍女修道会を母体とする学校法人清泉女学院により、日本女性にキリスト教ヒューマニズムに基く人格形成を施し、正しい人生観と奉仕的な精神の持主を社会におくすることを目的として、昭和二十五年四月神奈川県横須賀市に創立されました。

学則第一章第一条

「……キリスト教的世界観に立ち、高い知性と豊かな教養をそなえ、奉仕的精神に富む女性を養成することを目的とする。」

本学教育の特色 p.2

- 一、キリスト教ヒューマニズムに基く人格形成
- 一、正しい学問的態度を通じて人格的主体性の確立
- 一、共同体的精神の実践
- 一、社会的、国際的使命の自覚

本学の教育の基本的原理 p.3

キリスト教ヒューマニズムの教えるもの

一、絶対者との関係

——永遠とのつながり——

人間を超える絶対者の存在を認め、
この絶対者と、相対的な有限の存在である自己との関係を自覚して生きる。

一、人格の尊重

すべての人間を人格として一切の差別なく一様に尊重する。

一、人類愛

人類はみな神を父とするきょうだいであるから互に愛し合う義務がある。

モットーの解説 p.4

キリスト教ヒューマニズムによれば、人間は先ず神と隣人とに対する自己の正しい関係を自覚し、この自覚に基づいて、すべての行動を営むことになります。

「神の御前に清く」

神という絶対者に依存する相対的な有限な存在という、自分の分をわきまえて、創造者なる神を畏敬することは、人間の根本的な態度ですが、この無限な神とのつながりを自覚することは、人間をして自己の有限性をこえて、永遠のために生きることを可能にさせます。

日夜、神の前に反省しつつ、正しい良心を形成し、己れを求めず、眼前の利害を尺度とせず、常に純粹な高尚な動機で行動すれば、永遠に朽ちない徳の冠を得るであろうことは、校歌の歌う通りです。

清泉の学生には、この精神的態度が、女性の品位にふさわしい言動となってあらわれることが望まれます。服装その他の規定はこの実行を容易にするために定められています。

「正しく」 p. 5

モットーの後半は、人間が神から与えられた社会的使命を達成するのに必要な心構えを示しています。

人間の真の価値は身分、才能をこえた人間性の尊重にあります。従って私どもはお互いの人格を認め、その権利を尊重し、またそのために各自の義務を忠実に果さねばなりません。

つまり人間はみな、その生命を保ちながら人間としての完成に必要なすべての手段を用いる権利と義務を持っているのですから、持てるものは持たぬ者に与えて、この権利と義務の実現を可能にすることこそ社会正義です。しかし、現実の社会にこの正義が実現するためには、各自が自己の権利を主張するよりも、他人の権利を尊重し、堅忍、責任感、社会的連帯感、共同善に積極的に奉仕する精神などを以て、協力することが求められます。

「愛ふかく」 p.6

社会正義の要求を愛の精神によって、みたす時、初めて幸福な社会が実現します。

愛とは献身的な奉仕の精神と言いかえることができますが、この精神こそ人格的共同体を支えるものであり、また真の人格完成は共同体的生活の場で、愛を体験し、愛を実行することによって得られるものです。

家庭的精神が本学の特色であると言われるのも、本学が、教職員と学生とが互いに人格的な交りを以て結ばれる大学共同体であることを理想として、この精神の実現につとめているからです。

また、ここから、自分の身近な人々や社会にその愛を限らず人類全体を神を父とする一つの家族を見て、人種、民族、階級、職業の差別なく、すべての人々をきょうだいとして愛し、人類共存のため、世界の平和のために奉仕、協力する精神が生まれます。

清泉女子大学の使命 p.7

清泉の学生には、すべての人が一切の差別なく人格として尊重され、人間としての正当な幸福を享受することができ、社会がここの地上に実現する日をめざし、社会正義の要求に愛の精神を以てこたえ、社会のひずみに苦しむ人々の困難をやわらげ、世界の平和の回復のために働くなど、社会のために積極的に献身奉仕する使命が与えられています。

この尊い使命をより良く果すことが出来るため、常に新しい問題意識と熱心な研究意欲を以て、真理を探究する、という新しい学問的態度を通じて自分考え、反省する力を養い、徒らな印象や感情の刺激によって動かさず冷静に客観的に物事を判断し、自立的に行動できる主体性を身につけ、学会、学生会などの課外活動を通じて共同体的精神を身につけ、学則、規則の遵守によって、本学の誇りある伝統にしたがった気品ある女性となることが求められます。

「大学と建学の精神 —あえて「建学の精神」を読む—」

里見元一郎キリスト 教文化学科教授
『おとずれ』第92号1975年5月30日
* 1967年着任 1999年退職

「建学の精神」は余り読んだことがない。読むと立派な言葉が
きらびやかに居ずまいを正して並んでいるので驚いてしまう。し
かし、立派なことは立派で良いと思う。国家には憲法前文の精神
があり、家には家訓めいたものがあるように、私学には建学の精
神がある。

(略)

あらためて、精神の新しい継承を期待して、清泉女子大学の「建学の精神」の特徴を考えてみたい。これは文章としては短い
が読んですぐ理解されるとは言い難い。高い理想を論じようとすれば、どうしても文章が難しくなる。しかし、難しさの最大の理由は最初から絶対者と人間との断ちがたい関係が前提とされていること、そこから発する道徳的概念がばらばらに並んでいて、内的関連性で説明されていないこと、のゆえである。キリスト教的ヒューマニズム、愛と奉仕の精神、社会正義と社会的連帯感と
いった用語は素晴らしいのだが、たて続けに並べられれば消化不良を起こしてしまう。また、信仰がなければ分からないようでは建学の精神にふさわしくない。学問は万人に理解されるべきものであるからだ。

(略)

あらためて清泉の「建学の精神」を読むと、そこには絶対者としての神と相対的で有限な人間との立場の違いが明記され、人間のつくる真理もまた相対的であることを暗示している。かつて相対性は低い評価をされた。しかし、今は絶対性に何らかの形でつながりを持つ相対性がプラスに評価される時代となった。神は不可知の距離(遠くもあれば近くもある)を置いた真理の源泉で、人間の捉える真理はそれから溢れ出る流れの岸辺ぞいに変る風景の相対的認識に等しい。人間の相対的真理は相対的であるがゆえに、常に改善を要求される。この改善への努力は絶対性に帰依しようとする人間の心の渇きを癒してくれる。

絶対を求める宗教の真理もこの地上では相対的であるが、それゆえにまた宗派を超えて相対的真理を分有している。神を捉えがたく大きい真理と考えれば、そのどこかの部分に参与する形で世界中の人々は連帯することが出来る。すべての人が一切の差別なく尊重し合い、世界の文化や生活様式の多様性に謙虚で開かれた心を持つようになれば、やがて開かれた社会が生まれ、それが社会正義実現の基盤となるだろう。

信仰は開かれた心であり、家、血統、貧富、民族、国家を超え、さらに宗教をもこえて人間を人間的共感で支えるべきものである。学問を妨げるどころか、むしろ、奨励すべきはずのものである。相対的真理を少しでも絶対の方向へ近づけ得るなら幸いではなかろうか。信仰とはその小さな幸せを胸のポケットにいつも隠していることのように思われる。

ポイント1

本学における「キリスト教ヒューマニズム」
という用語の出現＝1967(昭和42)年

- 1934 聖心侍女 4 名来日
- 1938/05/12 財団法人清泉寮設立認可
- 1938/05/26 清泉寮学院設立認可
- 1938/06 03 清泉寮学院開校式

- 1950 清泉女子大学創立（横須賀）

- 1962 校舎東京に移転
第二バチカン公会議始まる
- 1964/08 トンキン湾事件 ベトナム戦争激化
10/10 東京オリンピック開催

- 1965 『学生要覧』創刊 モットー「神の尊前に、清く、正しく、愛深く」が記載される
- 1966-1976 文化大革命
- 1968- 学生の間で学生運動が盛んになる
- 1969/01/18-19 東大安田講堂事件

- 1970/03 /14 日本万国博覧会(大阪万博)開催(-09/13)
- 06/23 日米安全保障条約自動延長
- 1973 『学生要覧』に初めて「キリスト教ヒューマニズム」という用語が建学の精神として記載される





ジョン・ヘンリー・ニューマン

『新カトリック大事典』 第3巻 研究社 2002年8月



聖ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿 (1801-1890)

カトリックに関する最近の話題

教皇レオ14世(第267代)(2025年五月8日就任)により2025年11月1日、J・H・ニューマンが教会博士の称号を与えられる(38人目)

*過去の教会博士　ヒッポのアウグスティヌス、エウセピウス・
ヒエロニムス、
トマス・アキナス、カンタベリーのアンセルムス

聖ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿の生涯

バチカンニュース 2019年10月15日

- バチカンで10月13日、教皇フランシスコ司式のミサ中行われた列聖式で、ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿、ジュゼッピナ・ヴァンニーニ修道女、マリア・テレザ・チラメル・マンキディヤン修道女、マルグリット・ベイズの5人が、新たに聖人として宣言された。
- これらの聖人たちの中で、今回、聖ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿（英国1801-1890）の生涯を振り返る。

英国国教会の司祭から、カトリック教会の枢機卿へ

- 聖ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿の聖性への長い歩みは、唯一の真理に対する深く内的な探究に特徴づけられるものであった。
- 1801年、ロンドンに生まれ、1825年、英国国教会（イングランド国教会）の司祭となった。

- 宗教界のリベラリズムの拡大に対し、英国国教会においてキリスト教古来の伝統を神学や典礼に改めて生かし価値づけようとする、オックスフォード運動に関わった。この運動は、やがてアングロ・カトリシズムの基盤となっていた。
- ニューマンは、1832年から33年にかけて、地中海を旅行。以前から教会史や教父学を研究していた彼は、マルタや、シチリア、ローマなどを訪れる中、殉教者の歴史や霊性に触れ、カトリックへの関心をより深めて行った。シチリアでは病気を患い、病床で神に完全に自己を委ねる体験をした。

- 1841年、英国国教会の39の命題をカトリック教義と照らし合わせ分析・解釈したトラクト（小冊子）を出版、英国国教会の主教やリベラル派からの激しい反発を受けた。
- こうした中、ニューマンは、小教区活動を辞退し、オックスフォードに近い小さな村、リットルモアーに隠退した。
- 1842年、「キリスト教教義の発展について」を執筆。これをもってカトリック教会への回心の決心が熟した。
- 1845年、リットルモアーを訪れた御受難会のドメニコ・デラ・マードレ・ディ・ディオ神父（後に福者）の前で信仰を告白し、洗礼を受け、カトリック教会の一員となった。

- 1847年、カトリック教会の司祭として叙階された。ニューマンはその時のことを「嵐の後で、ようやく安全な港に入港したようだった」と述べている。
- 1849年、英国において、聖フィリッポ・ネリのオラトリオ会を初めて創立。
- 1854年、ダブリンのカトリック大学の学長に任命された。多くの書を著し、その中でも「アポオロギア」「グランマティカ」などが知られている。

- ニューマンは、1879年、教皇レオ13世より、枢機卿に任命された。
- 1890年、バーミンガムのオラトリオ会の自室で89歳で帰天。
- 墓碑銘には、ニューマン自身がその内的旅路を振り返った言葉をもって、「闇、そして表象から、真理へ」と記されている。

ジョン・ヘンリ・ニューマン —その生涯と現代的意義—

長倉禮子『カトリック研究』55（1989年）

ジョン・ヘンリ・ニューマン（John Henry Newman, 1801-1890）は、物質的繁栄を誇り、進歩を合言葉に、限りなく前進していくかのように思われた一九世紀の英国に生をうけた。周知の通り、この時代は、機械化と産業革命を媒体として、近代から現代へとかつてなかったほどの大きな変化を遂げようとしていた転換期であった。

（略）

理解されることの少なかったその生涯について語る時、人々はよく「ニューマンはあまりに時代に先んじて生きた」と言い、その優れた現代的感覚に驚く時には「百年以上も前から現代を予見していた」と言う。しかし、クリストファ・ホリスも言うように、現代へ通ずる道普請をした一九世紀の人々の中で、ニューマンほど強力にその名前が今日に至るまで生き続けている人はいないし、二〇世紀のキリスト教会のためにその道を整えた一九世紀のキリスト者は、ニューマンを措いて他にないであろう。

事実、キリスト教会は今世紀になって、ニューマンがはるか予見していたような状況へと歩みを運んできた。そして第二ヴァティカン公会議において、いかに大きくかつ深くニューマンの思想が生かされたかも我々は見てきたのである。この公会議の成果は、諸種の憲章となって我々に提示されたが、その一つ一つを注意深く読む時、改めていかに深くニューマンの思想と共通点を持っているかに驚かされる。今日第二ヴァティカン公会議のことを「ニューマンの公会議」と呼んでいる人さえいる。

第二ヴァティカン公会議に与えたニューマンの影響の一つは、エキュメニズムの精神である。ニューマンは東方教会の教父たちの影響を強く受け、福音の重要性を認め、心に内在する三位一体の働きを見出していた。

【カトリック改宗以後】（『新カトリック大事典』）

1851年、アイルランドに設立されるカトリック大学の総長就任の要請を受諾する。就任に先立ちダブリンで行った大学の理念についての連続講演(1854)は、後に加筆され不朽の著『大学の理念』(Idea of a University、1873)となった。しかし、ダブリン大司教カレンと大学の理念・運営・人事の面で意見が合わず、総長を辞任(1857)。ローマ・カトリック教会への転向以降、この総長辞任が象徴するように多くの挫折と確執を経験することになる。

(略)

(川中なほ子、高柳俊一)

『新カトリック大事典』 第3巻 研究社 2002年8月

知的信徒の自由を過激に主張する雑誌『ランブラー』（The Rambler）の主筆を一時務めるが、司教の勧めですぐに廃刊にした。最終号に載せた『教義に関して信徒に聞く』（On Consulting the Faithful in Matters of Doctrine、1859）は、信徒の意義を述べたもので、当時のカトリック教会にとっては余りに革新的なものであったため、以後100年にわたって再版を禁じられた。転向者であり、信徒の知的成長を望んだニューマンは、教会当局から危険視されたのである。

1863年の『アポロギア』（Apologia pro vita sua）は、ニューマンを誹謗する キングズリに対して反論するかたちで、カトリック教会への転向がいかに真摯なものであったかを披瀝したものである。その反響はニューマンの誠実さに対する圧倒的な支持となり、彼はかつての名声を取り戻した。1865年には『ゲロンシアスの夢』（The Dream of Gerontius）、翌年には『ピューージ博士に宛てた書簡』（Letter to the Rev. E.B. Pusey on His Recent “Eirenicon”）を刊行。1870年には認識論の分野で近年注目されるようになった労作『承認の原理』が出版された。

1878年オックスフォード大学のトリニティ・コレッジの名誉
研究員となる。同年即位した教皇レオ13世はニューマンの著作
を高く評価し枢機卿に任命、枢機卿親任式は1879年に執り行わ
れた。以後はバーミンガム郊外のエジバストン（Edgbaston）の
オラトリオ会修道院で生涯を過ごす。1889年のクリスマスにミ
サを捧げたのを最後とし、翌夏エジバストンで死去。1991年1月
22日、尊者に列せられる。

日本におけるJ.H.ニューマン

文学者としてのニューマン

坪内逍遙 上田敏 戸川秋骨

神学者としてのニューマン

植村正久 岩下壮一 吉満義彦……

* 岩下壮一のカトリック洗礼の代父は後の財団法人清泉寮第2代理事長
山本信次郎の弟の山本三郎

* 岩下壮一は後の財団法人清泉寮の代3代理事長田中耕太郎のカトリック洗礼の代父

- 1983年10月8日 日本ニューマン協会設立 会長 巽豊彦

- 「日本ニューマン協会について」 巽豊彦

日本ニューマン協会が呱呱の声を上げたのは今を去る二十三年前、1983年（昭和五八年）十月のことであった。

オクスフォード運動勃発から百五十年目にあたったその年、まず七月四日から八日にかけてバーミンガムのニューマン・カレッジを会場として〈第十回国際ニューマン会議〉が、次いで七月十一日から十六日までオクスフォード大学キープル学寮を会場にして〈オクスフォード運動百五十周年国際会議〉が催されたが、幸いにもこの両者に川中なほ子、長倉禮子の二氏が出席されたのである。

そしてこのお二人から土産話を聞く報告会が上智大学の一室で催されることになった。期日は十月八日とし、ニューマンに関心をお持ちと予想される方たちをリストアップしてご連絡したところ、二十名ばかりの出席者があったのだ。

その席で、国際会議の報告を聞いたあと、参加者の全員がそれぞれニューマンに寄せる思いを中心にした自己紹介を行ない、最後に、このような集まりを継続してほしいという要望を集約して、散会した。

これが日本ニューマン協会の発祥であり、……

『時の流れを超えて J. H. ニューマンを学ぶ』

日本ニューマン協会編著 教友社 2006年8月

教皇レオ十四世、2026年4月17日、中央アフリカ・カトリック大学(カメルーン、ヤウンデ)での演説



4月17日、カメルーン的首都ヤウンデにある中央アフリカカトリック大学で、同大学の学生と教授らと共に過ごす教皇レオ14世 (OSV News photo/Guglielmo Mangiapane, Reuters)

今日、これまでに増して必要とされるのは、大学、とくに、カトリック大学が、生活と探究の真の共同体となり、学生と教員を知識における兄弟愛へと導き、「真理であるかたの喜びを共同体的に経験させ、その意味と実践的な内容を深めることです。福音と教会の教えが――大学の人間的良心の発展を強化するあらゆる力との寛大な協力のうちに――推進するように呼びかけているのは、真の出会いの文化です。それは、すべての被造物に対する神の愛によって開かれた光の空間の中で、各人がそれぞれのたまものを交換することによる、すべての真の生きた文化が出会う文化です。

世界の多くの人々が精神的また倫理的な目的を見失い、個人主義とうわべだけのものと偽善のとりこになっているように思われる時代にあって、大学は優れた意味で友愛と協力、内面性と反省の場です。中世におけるその起源から、大学の設立者たちは真理そのものを目的としました。今日においても、教授と学生は真理の共同の探求をその理想であると同時に生き方として受け入れることを求められます。実際、聖ジョン・ヘンリー・ニューマンが述べているとおり、「すべての真の原理は神に満ちており、すべての現象は神へと導く」(1) のです。

教皇ベネディクト十六世が強調したとおり、真理は、対話（dialogos）を作り出すことば（logos）であり、ゆえに、相互理解と交わりを作り出すのです」（教皇フランシスコ使徒憲章『真理の喜び——教会立大学と学部について』4b [Veritatis gaudium]）。

他方で、ニューマンが「やさしき道しるべの光」と呼んだもの、すなわち「信仰の光は、愛の真理と結びられているかぎり、物質的すなわち異質なものではありません。愛はつねに肉体と霊魂の中、で生きるからです。信仰の光はイエスの光り輝く生涯から発する、受肉した光です。この光は物質をも照らし、物質の秩序に信頼し、物質の中で調和と理解の歩みがますます開かれることを知っていないままです。こうして科学のまなざしは信仰から恩恵を受けることにならなくなります。信仰は科学者が、尽きるこまなく豊かな、ありのままの現実に開かれ続けているよう招きまします。信仰は批判的な感覚を目覚めさせます。すなわち、研究が自らのお公式に満足しないよう仕向け、自然がいつそ、偉大であることとを悟るようによります。信仰は、被造物の神秘に對する驚きへと招くことによって、科学研究で示される世界をますます照らすために、理性の視野を広げるのです」（教皇フランシスコ回勅『信仰の光』34 [Lumen fidei]）。

教皇ベネディクト十六世が強調したとおり、真理は、対話（dialogos）を作り出すことば（logos）であり、ゆえに、相互理解と交わりを作り出すのです」（教皇フランシスコ使徒憲章『真理の喜び——教会立大学と学部について』4b [Veritatis gaudium]）。

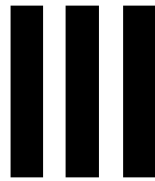
ポイント2

- **列福** 2010年9月19日 列福決定者 ベネディクト16世
- **列聖** 2019年10月13日 列聖決定者 フランシスコ
- **教会博士** 2025年11月1日 教会博士決定者 教皇レオ14

- 『**大学の理念**』 Idea of a University (1852－1858)

* ニューマンがアイルランド・カトリック大学初代総長前から総長職にあった7年間との間に行なった大学論に関する講演、講義、エッセイ等をまとめたもの

*



田中耕太郎



『現代随想全集』 第27卷 (田中耕太郎, 恒藤恭, 向坂逸郎集) 東京創元社 1955年1月

- 1917年-1945年 東京帝国大学在職期間
- 1942年-1951年 財団法人清泉寮理事長在任期間
- * 1941年4月より財団法人清泉寮理事長
カルメン・ウスタラから山本信次郎に交代
- * 1951年2月21日-財団法人清泉寮→学校法人清泉女学院
理事長はエルネスティナ・ラマリョ(~1965年)
- 1945年10月 文部省学校教育局長
- 1946年5月22日-1947年5月24日 第1次吉田茂内閣文部大臣
- 1947年5月3日-1947年5月2日 参議院議員在任期間
- 1950年-1960年 最高裁判所長官在任期間
- 1961年-1970年 国際司法裁判所判事在任期間
- 1974年3月1日 新宿区聖母病院にて帰天

財団法人清泉寮→財団法人清泉女学院

- 1934 聖心侍女 4 名来日
- 1938/05/12 財団法人清泉寮設立認可理事長 カルメン・ウスタラ
- 1938/05/26 清泉寮学院設立認可、校長エルネスティナ・ラマリヨ
- 1938/06 03 清泉寮学院開校式
- 1940/10-1941/04 教区長次々に外国人司祭から邦人司祭に引継ぎ
- 1941/03/22 清泉寮学院校長Sr.ラマリヨ→藤森さと採用認可
- 1941/04 財団法人清泉寮理事長Sr.ウスタラ→山本信次郎
- 1942/06/18 財団法人清泉寮理事長山本信次郎→田中耕太郎
- 1950/06/04 清泉女子大学開学式
- 1951/01 財団法人清泉寮→学校法人清泉女学院

清泉女子大学初代理事長 田中耕太郎

田中耕太郎「カトリシズムと大学の理念」1948年
(昭和23.5.17 「上智大学開学式講演要旨」 『カトリック思想』 3号)
『カトリシズムと現代』 所収(1949年9月 公教社)



◇—1948年(昭和23年)

新制大学として発足

文学部（哲学科、史学科、英文学科、ドイツ文学科、新聞学科）、経済学部（経済学科、商学科）を開設

……総合大学の意味における大学が、法学、医学、神学、哲学等の各学部の百貨店的併立であってはならないのであり、それ等の学部が研究上及び教育上相互に連絡を保ち、共同してその機能を発揮しなければならぬことは当然である。(今日新学制の実施と共に、各地において総合大学の設立が計画せられているが、それは大学の本質にてらして、単科大学の単な寄せ集めであってはならない。)

(略)

……大学はある種の専門の学術を研究及び教授する学校ではなく、人間に必要な一般的知識及び教養を修得する機会を得せしめる教育施設であることは疑いのないところである。この故に若し大学の邦語をUniversityの語を以て翻訳するならば、我が国における単科大学例えばCommercial University又はMedical Universityはそれ自体として矛盾した観念であり、大学は総合大学に限らなければならぬことになるのである。

(略)

学問は屢々せいぜい部分的真理を以て全体的真理と主張するの誤謬を犯したのであった。

恰も教会の支配から独立して自我の意識を主張し、自由にされたと誇称する近代的人間が、道徳から及び同胞から孤立して、現代社会のアナーキーの原因を作ったごとく、「神学の侍女」の状態から解放せられたと自負する近代的諸学問は、各自の分野における貴重な発見は格別として、畸形的な発達を遂げ、他の世界と無関係に対立するか又は不当に自己の勢力範囲を拡張するの誤謬に陥ったのである。それは人間の理性の不当な濫用である。

(略)

かような総合、それは窮極において真善美の総合に到達する。この最高の総合を自覚することによって、学究は安んじて自己の極めて局部的な専門の研究に情熱を以て精進することができる。

又これによって学問は単な功利的動機を脱し、英米においていわれているリベラルな知識(Liberal Knowledge)としての権威を獲得し、これを涵養する大学は、専門的研究と並んで、又これを通して学生の真の意味の人間形成の使命を果し得るのである。そこに大学における研究と教育との調和が存在するのである。

(略)

この際我々はカトリックへの二人の偉大な改宗者を想起する。その一はカーディナル・ニューマンである。彼れの大学理念論は我々に、真の学究的態度と大学の使命について教える。それは学問の自己反省、各分野の有機的関連、諸学問の階層的秩序、それ等の人生の目的による最高の統一を示す、現代に最も欠けている真の文明批評である。その二は「露西亞のニューマン」といわれたヴラヂミル・ソロヴィヨフである。彼れは西欧哲学の排他主義、抽象性を鋭く批判し、宗教、哲学及び実証科学を総合する雄大な神智学——彼れの所謂「自由な神智学」(theosophielibre)を提唱する。

彼れ等の所説において、真の人間性に出発しない、近代的無神論的ヒューマニズムを克服するところの、人間のあらゆる要求に深き洞察と同情をもちつつ、しかもそれ等に正しい方向を与えることにより、それぞれに正当に所属する活動分野を示し、不当な濫用を戒めるカトリック的ヒューマニズムが代表されている。この二人の哲学は、終戦後新に組織改革されようとしている我が大学、我が学界に未だ明かにせられていない真理を啓示するものといわなければならない。

カトリックによって代表せられる基督教的世界観、真善美そのものである神の主権の下において、学問や教育は極めて権威を得、その使命を果すことを得るのである。

(昭和二三、五、一七 上智大学開学式講演要旨『カトリック思想』三号)

田中耕太郎『教育基本法の理論』

(昭和36年2月、有斐閣)1961年

第二編 教育思想史 第二章 西洋教育思想 第三節 十七、八世紀

第一款 総説

もちろん中世的クリスト教が人間性や異教文化の意義を無視したものでないことは、すでに述べたところからして明かである。ただ中世においてはそれらを絶対的、自己目的的のものと認めず、世界の神化、クリスト教的人間の完成の手段と認めた点において、これと文芸復興的世界観との間の差異が存するのである。従ってクリスト教的人間の完成の手段と認めた点において、これと文芸復興的世界観との間の差異が存するのである。従ってクリスト教的世界の観はヒューマニズムを排斥するものではなく、それを正しく発達せしめ、一層高次的な立場から完成することを企図するのである。

キリスト教的ヒューマニズムは、キリスト教的価値論の精神に適合するように、人格の発展に努力する。この点においてカトリックの殉教者で、ユートピアの著者として知られているトーマス・モルス(Thomas Morus 1478-1535)はその友人デシデリウス・エラスムス(Desiderius Erasmus 1466-1536)と同じくキリスト教的ヒューマニストであった。なおこの思潮はイエズス会の教育方針の中において存続発展せしめられているのである。

第三編 各論 第五章 大学論 第二節 諸学問の協同性

日本をふくむドイツ系統の大学において、その目的が学問研究と人間の教育にあり、その中のいずれかをも除外できないことは特筆を要しないところである。もし大学の目的が単なる研究にとどまるとするならば、そこに学生は存在するわけはなく、大学は一種のアカデミーその他の研究機関と異なるところがない。また大学において学問の研究が行われないうえ、単に学生を教育するだけとするならば、大学はこれを専門学校や高等学校、その他の学校と区別することができなくなる。

このことはおそらく何人も異議のないところであろう。大学における研究と教育の二元性が単に偶然的な併存であり、實際的理由から説明できるにすぎないものか、それともそこに理論的の関連が存在するであろうか。例えばフィヒテ及びその以降のドイツ観念論哲学における大学論は学問の研究に重きをおく。しかるにジョン・ヘンリー・ニューマンを以て代表される大学論は教育を大学の主たる目的とする。

ニューマンは大学の真の機能が「社会の良き成員」(good members of society)の育成にあることを主張する。大学の目的は学問的天才をつくり出すことにはない。従って学問の専門化を排斥する。そこには将来の研究者の養成が考慮に入っていないからである。世人が往々ドイツの大学に比較してオックスフォード大学を非難するのはこの意味においてである。かようにニューマンは大学の使命を研究でなく教育に求めるからして、博士課程というものを認めない。大学はゼントルマンを養成することを目的とする。彼がゼントルマンというのは、マンナーが宗教のようになっている人間ではなく、プラトーのいう哲学者、というのは「人生を明瞭に見また全体を見る」者であり、社会における訓練を受けた者である。「オックスフォード教育の花」とされているのもいるもの、これがゼントルマンなのである。

この故にニューマンにおいては、教育を目的とする大学と研究を目的とするアカデミーとの間には、知的労働の分業が主張される。発見することと教育することとはちがっている。研究は隔離と静寂とを要求する。従来自然科学的大発見は大学ではなされた例がなかった。

しかしニューマンの教育論は知識論と結合している。この点において我々はドイツ観念論哲学の大学論との間に根本的な類似点の存在を認めることができる。ニューマンによれば大学教育は結局真の知識(knowledge)によってなされなければならぬのである。ドイツ観念論においても、ニューマンにおいても知識とか学問とかが大学理念論の中核をなすのである。

清泉女子大開校式

横須賀の聖心侍女会によつて経営される清泉女子大学の開校式は六月四日午後、吉田首相、田中最高裁長官、天野文相、デツカー少将並に同夫人、スペイン使節団長フランシスコ・カステイロ氏、同夫人、横浜教区協田司教、イエズス会ロス司教ら列席のもとに新大学校舎において開行された。

式は国歌斉唱によつて聖心侍女会日本支部長エルネスティナ童貞の開会の挨拶に始まり、同大学学長クラレ童貞の挨拶の後田中長官から大学の理想に關し又吉田首相の女性の深處及び社会における力について、天野文相は聖心侍女会の活動に感謝するそれぞれの祝辭が述べられた、次に協田司教、ロス司教はそれぞれ教育及び教育者の任務について説き、デツカー少将は清泉女学院の発達の経緯を想起して今後の発展を希望した、又同会が日本で活動を開始した当時、同会に特別の援助を与えたカステイロ氏は同会に因する歴史を説明して今日の発展の喜びを表明した。

聖心侍女会は一八七七年スペインに創立され、一九三四年から日本で活動を始めた、最初に計画されたのは、吉田首相の前夫人の援助による清泉寮の創立であつた、麻

布三河台町に開設され女学校卒業者達に仕上げの教育を施していたが、戦時中、強制疎開のため閉鎖された、同会ではその後一九四五年長野に中学校及び高等学校を開校、一九四七年、横須賀に小学校及び女学校を設立し一九四八年に高等学校も併設、今回の女子大学にまで発展したものである。

新大学は英文科、国文科の二科に分れているが小、中、高等、大学全部の生徒を合せて千二百三十四名を收容している、又長野には中等八十五名、高等六十名の生徒が收容されている(東星)



総司令部のアカハタの取扱いは大いに示唆にとんでいる。それはアカハタを發禁にすることも、また事前の検閲制度を復活することも、ともに「大衆の哲學」に反するものとして之をとらず、たゞ幹部を追放する処置をとつたのである。制度の運用は人にあるのだから、ある制度をかえるにはその同じ当る人間を目標にするといふこのやりかたは、共産党に対する処置にも示されている。この場合にも党そのものを発禁するよりも、幹部

清泉女子大学開校式

(『カトリック新聞』 第1172号 1950年6月18日)

横須賀の聖心侍女修道会によつて経営される清泉女子大学の開校式は6月4日午後、吉田首相、田中最高裁判官、天野文相、デッカー少将並に同夫人、スペイン使節団長フランシスコ・カステイロ氏、同夫人、横浜教区脇田司教、イエズス会ロス司教ら列席のもとに新大学校舎において開催された

式は国家斉唱につづいて聖心侍女会日本支部長エルネステイナ童貞の開会の挨拶に始まり、同大学学長クラレ童貞の挨拶の後田中長官から大学の理想に関し又吉田首相の女性の家庭及び社会における力について、天野文相は聖心侍女会の活動に感謝するそれぞれの祝辞が述べられた、次に脇田司教、ロス司教はそれぞれ教育及び教育者の任務について説き、デツカー少将は清泉女学院の発達の経過を想起して今後の発展を希望した、又同会が日本で活動を開始した当時、同会に特別の援助を与えたカステイロ氏は同会に関する歴史を説明して今日の発展の喜びを表明した

『清泉二五話』より 第一五話 大学開校式

『清泉二五話』 大船清泉女学院 1974年10月

1950年6月4日午後3時、教会や市の高官を招いて、横須賀清泉大学の開校式を荘厳に挙行了た。

そこに集まった人々は、すべて高貴で純粹に学問をこいねがう人々、相互に思いやりがあり、親密なふんいきをもった人々だけだったので、式はなごやかなふんいきの中に進行していった。

たくさんの来賓者の祝辞の中で、田中耕太郎博士の祝辞は、とくに「キリスト教の普遍的な理念の上に築かれた大学は、日本に多くの善を招くために召されたものである」ことを強調し、

吉田茂首相は氏がイタリー大使としてローマに滞在中、氏の夫人が同市の聖心侍女修道会本部を訪れていた当時からすでに昵懇であり、昭和九年同会が来日し麻布に居を構えて清泉寮を創設するやその親交はますます深まり、何事によらずシスター達の片腕となろうと努めたが、不幸戦争末期にシスター達との音信はとだえてしまった。それが終戦と同時にこの地で、こうした学校を開き親交を新たにし得たこと……

『Cuadernos』 ACI 1950 No.49







El Dr. Tanaka



El Dr. Kotaro Tanaka

El doctor Kotaro Tanaka, conspicuo estólido y hombre de mucho prestigio en la vida pública, acaba de ser elegido para el importantísimo cargo de *Chief Justice*, que viene a corresponder a nuestro Presidente del Tribunal Supremo. Muy buen amigo nuestro, aceptó con gusto la presidencia de nuestro «Zaidan», especie de comité oficial, que ostenta la representación de la persona jurídica constituida por el cuerpo docente, según lo exige la legislación del país. El discurso del señor Tanaka puede considerarse como el más importante de todos los pronunciados aquella tarde, tanto por lo fundamental de las ideas expuestas como por la firmeza, discreción y habilidad con que alabó al Catolicismo. Recogiendo unas palabras de la M. Clara Crawford, insistió en la idea de que la educación, si ha de cumplir del todo su cometido, tiene que procurar desarrollar y perfeccionar al hombre entero, y no tan sólo sus facultades mentales. Pasó luego a explicar el sentido de la palabra «universidad», que se viene aplicando a estos centros de enseñanza superior, y denunció como un mal moderno, muy en boga actualmente en el Japón, el afán desmedido de especialización. Esto presenta el inconveniente de que forma criterios estrechos, hombres que carecen después de la suficiente amplitud y claridad de juicio para sintetizar y apreciar el valor de las ideas generales. Estos errores que se cometen en la educación de la juventud son causa de males, como el nacionalismo exagerado y mal entendido de los años precedentes a la guerra, y el peligro que se corre actualmente de que, según a su vez falsamente interpretados los nuevos idearios democráticos. Una Universidad como ésta, basada en los principios e ideales universalistas de la Iglesia Católica, está llamada a hacer un bien inmenso al país. Esta clase de educación es también muy necesaria a la mujer, ya que ella es la llamada a guiar los primeros pasos de sus hijos. Los padres de hoy pueden entregarnos confiados a sus hijas en la seguridad de que así se les dará una educación íntegra.

Al acabar de hablar el señor Tanaka, S. E. el Primer Ministro se dirigió a los asistentes en un simpaticísimo discurso que fue escuchado con delectación. (Precisamente en aquellos momentos empezaba el acaudalamiento de las elecciones, celebradas aquella mañana, cuyo resultado fue un triunfo extraordinario del partido que dirige el señor Yoshida.) El Primer Ministro, que pertenece a la carrera diplomática, ha vivido mucho en el extranjero, y durante su estancia en Boma, su esposa, que era católica, conoció y trató mucho a nuestras Madres. Al llegar las primeras migoneras a Tokyo, el año 1934, las acogió con grandísimo cariño, y gracias a sus buenos servicios y acertados consejos, se pudo encontrar una apropiada y fundar el primer colegio, para jóvenes de la aristocracia. Las propias hijas de los señores Yoshida asistieron a las clases. Todos estos recuerdos de la esposa muerta los evocaba ahora el primer Ministro con visible emoción.

Discurso del Primer Ministro

«Yo —dijo— quiero hacer constar que en este momento, más que en ningún otro, hablo en nombre de mi mujer, a quien represento en esta ocasión. Ustedes —añadió dirigiéndose a la M. Superior—, al invitarme a mi,

invitaban en realidad a mi mujer, y yo tengo mucho gusto en reconocerlo así y en asistir en su nombre. (Las primeras palabras del señor Yoshida, al mismo tiempo muy sencillas y muy sentidas, fueron acogidas con murmullos de simpatía, que se repitieron luego en varios momentos del discurso.)

«Yo no puedo menos de pensar ahora —continuó— en la alegría con que mi mujer hubiera contemplado hoy este espectáculo. Desde el Cielo nos estará mirando complacido. Aun recuerdo cuánto hablaba en casa de aquel colegio de Tokyo por el que tanto entusiasmo sentía. (Quién hubiera de decirnos entonces que iba a transformarse en breves en esta Universidad! Yo no puedo menos de ver con satisfacción esta Obra en que se está formando el futuro Japón, tal como mi esposa, tan amante de su Patria, lo hubiera deseado.)

Aquí, el señor Ministro hace un elogio del patriotismo de su esposa y refiere cómo durante los años de su vida en el extranjero, siempre sabia, en fiestas y reuniones, laborar por el prestigio de su Patria y dar a conocer a aquellos diplomáticos de todos los países cómo es el verdadero Japón.

«Estamos atravesando momentos difíciles —prosigue el señor Yoshida—, y la esperanza de la nación está en la juventud. Sin embargo, yo no estoy del todo satisfecho de cómo se orienta en muchas partes a los estudiantes. Creo firmemente que la mujer está llamada a jugar un papel trascendental formando en los hogares a los hombres del mañana, y, por lo tanto, de la gran importancia de educar bien a las niñas y a los jóvenes. De mi mismo puedo decir que, habiendo perdido a mi padre en la infancia, fui educado por mi madre, la cual me repitió muchas veces que no me desalentara nunca, que no me dejara vencer del pesimismo en las dificultades de la vida. Sus enseñanzas se quedaron para siempre grabadas en mi memoria y me han sostenido en innumerables ocasiones. Verdad es que más tarde volví a encontrar en mi mujer el mismo apoyo y los mismos consejos.»

Refiriéndose después a la obra realizada por el almirante Becker, añadió:

«Cuando yo pensaba, a veces, por Yokosuka durante los últimos años, no podía menos de admirar las mejores materiales que se iban llevando a cabo en la ciudad, y me confirmaba en la opinión de la buena voluntad y acierto con que el Almirante trabajaba por el bien del Japón. Pero ahora estoy viendo algo mucho más importante y trascendental: este Colegio que él ha iniciado y protegido. Ya sabía yo de su existencia, pero no me daba cuenta del enorme incremento que ha tomado en tan breve tiempo. Conservaba en la memoria la idea del colegio de Tokyo donde iban mis hijas, y suponía que se trataba del mismo pequeño colegio trasladado a la pequeña Yokosuka por las circunstancias de la posguerra. Tan sólo al ser invitado, hace pocos días a esta ceremonia, me enteré con admiración de la verdad que ahora contemplo complacido.»

En un tono de broma, dirigiéndose al Almirante, añadió:

«Yo pensaba que este pueblo era su feudo, señor Almirante, pero ya veo que su dominio en él es también espiritual.»

田中耕太郎博士 (El Dr. Kotaro Tanaka)

著名なカトリック信者であり、公的生活において非常に高い名声を持つ田中耕太郎博士は、このたび「Chief Justice」という極めて重要な職に選ばれた。これは我が国で言えば最高裁判所長官に相当する地位である。

博士は私たちの親しい友人でもあり、喜んで私たちの「財団」の理事長職を引き受けてくださった。この財団は、国内法の要請に従い、教育機関という法人格を代表する、いわば公式委員会のような組織である。

田中氏の演説は、その日行われたすべての演説の中でも最も重要なものと見なされうる。というのも、そこで述べられた思想が根本的に重要であっただけでなく、カトリックを称賛するにあたっての態度が、毅然としていながらも慎み深く、しかも巧みであったからである。

氏はクララ・クロフォード修道女の言葉を引用しながら、教育というものは、その使命を完全に果たそうとするならば、人間の精神的能力だけではなく、「人間全体」を発達させ、完成させるものでなければならぬと強調した。

続いて氏は、高等教育機関に用いられる「大学 (universidad)」という言葉の意味を説明し、日本で近年流行している過度な専門化志向を現代の弊害として批判した。この傾向には、視野の狭い判断力しか持たない人間を生み出し、一般的理念を総合的に理解し、その価値を正しく評価するために必要な広い視野と明晰な判断力を欠いた人物を育ててしまうという欠点がある。

若者の教育において犯されるこうした誤りは、戦前の誇張され誤解された国家主義のような弊害を生み出した原因であり、また現在では、新しい民主主義思想までもが誤って解釈される危険を生み出している。

このような、カトリック教会の普遍主義的な原理と理想に基づく大学は、日本に計り知れない善をもたらす使命を担っているのである。

この種の教育は女性にとっても極めて必要である。なぜなら、女性こそが子どもたちの最初の歩みを導く役目を担っているからである。今日の親たちは、自分たちの娘を安心して私たちに託すことができる。ここでは、娘たちに全面的・総合的な教育が与えられるからである。

Sr.カンダモ

ポイント3

**田中耕太郎は
1942年から1950年まで
「財団法人清泉寮」の理事長（第3代）を務めた、
「清泉女子大学」初代理事長であり、
J・H・ニューマンの大学論（『大学の理念』）を
本学でも適用すべきと考えた
キリスト教・ヒューマニストであった。**

IV

Sr.内山八寿子



新学長にS・内山

前学長鎌倉修道院長に

シスター・エルネステイナ・ラマリヨは本年度三月から鎌倉修道院院長に就任されたため、本学の学長を辞任された。昭和三十七年本学が横須賀から東京高川区五反田に移籍された年に、シスター・エルネステイナ・ラマリヨが学長に就任された。シスター・エルネステイナ・ラマリヨの学長就任期間はたったの四年間という短かいものであったが、学生にとって大変愛のある方であった。学生は母としてお世話していたのでシスター・エルネステイナ・ラマリヨがこの島津山から去られ「学長様の別居」が聞けなくなるとは大変残念である。シスター・アントニア・内山があらたに学長に就任され、学長室も、本館から新館の元教務部長室に移動した。シスター・アントニア・内山は小柄で、銀ぶちの眼鏡をかけた温和な方で、いつも豊かな笑みを浮かべていられる。新学長は本学創立から教鞭をとられ、本学の歴史と共に歩まれ、この度学長に就任された。今までは主に教務の仕事にたずさわっておられ、学生と直接の触れ合いの機会はなかったが、学生が勉強するためにいろいろ準備などしてくださった方である。学生の身分として勉学に励み、「神の尊前に、清く、正しく、愛をこめて」の原則に基づいての学生生活をとおくってほしいと新学長は遠くからおられ

- 新学長略歴**
- 大正五年一月八日生る
 - 昭和十五年三月 東京女子大学 文学部英文学科 卒業
 - 昭和十七年九月 東北帝国大学 法文学部文学科 中退
 - 昭和二十三年九月 清泉女学院 専門部教師
 - 昭和二十五年四月 清泉女子大学 文学部専任講師
 - 昭和二十八年七月 渡欧ローマ留学のため休職
 - 昭和三十三年二月 帰国後復職
 - 昭和三十三年八月 学校法人清泉女学院理事就任 現在に至る。
 - 昭和三十四年四月 清泉女子大学 文学部助教
 - 昭和三十五年四月一日 清泉女学院小学校、中学校、高等学

校長就任

昭和三十七年九月 清泉女子大学 文学部教授

昭和三十八年二月九日 清泉女学院小学校、中学校、高等学

校長就任

昭和四十二年四月 清泉女子大学 学長就任



入学試験

本科の筆記試験は二月二十三日、面接試験は二十五、二十六日の両日に行なわれ英文科は筆記試験が三月十六日、面接試験が十八十九、二十日の三日間であった。

今年は去年のベヒブームのあおりを受け、就職希望の競争率に上がっている。そのため、受験生の採用にも、おなほ格を願う折りが少ない。また、付属の文庫の敷も増える傾向にあやうな。不

生のすべてがわかるわけはない。しかし、面接というものは人の心がまをを知る原で感あるだろう。

松田教授

学位授与さる

東西文化交渉史を専門に四書五経も修める松田新一教授は三月二十五日に、立教大学より

新学長にS・内山／前学長鎌倉修道院長に

『ながれ』 第20号(1962年4月14日発行)

シスター・アントニア・内山があらたに学長に就任され、学長室も、本館から新館の元教務部長室に移動した。シスター・アントニア・内山は小柄で、銀ぶちの眼鏡をかけた温かな方で、いつも豊かな笑みを浮かべていられる。新学長は本学創立から、教鞭をとられ、本学の歴史と共に歩まれ、この度学長に昇任された。今までは主に教務の仕事にたずさわっておられ、学生と直接の触れあいの機会はなかったが、学生が勉強するためにいろいろ準備なさってくださった方である。学生の本分として勉学に励み、「神の尊前に、清く、正しく、愛深く」の校訓に基づいての学生生活をおくってほしいと新学長は望んでおられる。

- 1916年1月8日に生る
- 1940年3月 東京女子大学大学部英文学科卒業
- 1942年9月 東北帝国大学法文学部文学科 中退
- 1948年9月 清泉女学院専門部教師
- 1950年4月 清泉女子大学文学部専任講師
- 1953年7月 渡欧ローマ留学のため休職
- 1957年10月 ローマ教皇庁立レジナ・ムンデ女子神学大学卒業
- 1958年2月 帰国後復職

- 1958年8月 学校法人清泉女学院理事就任 現在に至る。
- 1959年4月 清泉女子大学文学部助教授
- 1960年4月1日 清泉女学院小学校、中学校、高等学校長就任
- 1962年9月 清泉女子大学文学部教授
- 1963年2月9日 清泉女学院小学校、中学校、高等学校長辞任
- 1967年4月 清泉女子大学学長就任

清泉女子大学々長 内山八寿子氏

(宮代源司氏)

エルネスティナ・ラマリヨ前学長について、四月一日より、内山八寿子教授が学長として就任した。新学長は、大学創立当初より、学監として、大学の内部的組織、管理の面で、学長を助け、大学の発展に努力しながら、その間に、学校法人清泉女学院理事、清泉女学院小学校・中学校・高等学校々長も兼任し、カトリック精神による一貫した女子教育の実現に力を盡した。

大学々監としては、前学長を助け、たまゝ、同大学の母体聖心侍女修道会が、スペイン系女子修道会であるので、同会内の学位をもつスペイン人修道女を多数招聘し、特色あるスペイン語、スペイン文学科を企画し、次いで、西洋文化の正しい理解に資するため、広く学外に、カトリック系の権威ある学者を講師として求め、キリスト教文化学科の創設にあたった。ちなみに聖心侍女修道会は、ローマに本部をもち、ヨーロッパ、中南北米、アフリカ、アジアの各地に修道院をもち、多くの学校を経営している。

新学長は、昭和十五年、東京女子大学文学部英文学科を卒業し、向学の念に燃えていたが、当時は戦前で、女子の入学を許可する国立大学は、東北・九州・京城帝大に限られていたので、東北帝国大学法文学部文学科を志望し、傍系よりの至難な入試を優秀な成績でパスし、入学した。(……)その履歴の示す通り、当時の女子としては珍らしい程の学問好きで、真理探求に人生の生甲斐を見出そうとして、旧帝大に入学したのであるが、たまたまカト

リック女子修道会の経営する寮に寄宿し、それが他日カトリックへの入信、またひいては修道会入会の契機となったのである。即ち学者としての生活以上のものを修道生活に見出し、神と人々への奉仕の為に、一生を奉献すべく聖心侍女修道会に入会した。その為ローマに留学、ローマ教皇庁立レジナ、ムンディ女子神学大学において、神学を修め、非常に新しい神学的問題についての論文を提出し、世界各地より集まった学生達の中で注目された。

改宗以前より親しんでいたニューマンの著書の真の理解をローマ留学中に得てから、その研究に従事したいとの望みは、今でも持っている。人柄は聡明、誠実で学者タイプであるが、困難な大学経営にぶつかって行くファイトも持ち合せている。またキリスト教をバックボーンとした正しい教育活動を通じて、まじめな真理探求の努力によって知性をみがきながら、同時に宗教的情操を基調として、暖い家族的ふんいきのうちに、自分を忘れて、他人に奉仕する愛の精神を学び、刹那主義の軽挙妄動をさけて、自分の行動に責任をもつ真に主体性のある女性を育成していくという教育者の使命を自覚している事はいうまでもない。

なお同氏の親族には学者が多く、慶應義塾大学法学部教授、内山正熊氏(法博)は実弟で、法政大学教授、内山尚三氏(法博)も従弟にあたり、実妹、義弟は皆学位をもち、田中耕太郎氏、大島康正氏も姻戚にあたっている。

* Sr.内山は田中耕太郎の妹(植野すみ)の娘(植野美代子)の夫(内山正熊)の姉ということになる。

* なお、植野美代子氏の娘の内山美知子氏は本学キリスト教文化学科第16期生で、その夫は聖心侍女修道女Sr.石川治子の兄

マリア・アントニア内山八寿子について
塩谷惇子学長宛 内山正熊氏書簡(2001.4.3)

初期の頃田中耕太郎理事長を迎えたりして、姉がシスターの方とのとりなしをしていたのである。(2000.12.11)

内山八寿子によるニューマン関連論文

- 「良心による神の存在証明—ニューマンの「承認の原理」を中心として—」（『清泉女子大学紀要』10 1963年）
- 「孤高の人カーディナル・ニューマン」（『清泉女子大学人文学研究所紀要』Ⅲ 1981年）
- 「カーディナル・ニューマン『ノーフォーク公に宛てた書翰』をめぐって—グラドストンとの論争の周辺—」（『清泉女子大学人文学研究紀要』Ⅵ 1984年）

「島先生のおもいで」 内山八寿子

『麗泉会会報』1986年(昭和61年)第19号

一昨年、長らくのご無沙汰のおわびの意を含めて、その頃、清泉女子大人文研紀要に掲載した、カーデナル・ニューマン研究の小論文抜き刷をお送りしたところ、意外にも枚方市の福田医院ご入院中の先生からご返事を頂いた。

「拝復、手許に適切な用紙がありませんので、こんな紙で失礼します。一中略一御発表の論文に私は、ニューマンの開かれた教会、即ち、神への正しい服従と学問の自由とが両立できるという説には全く同感を感じました。

以上 ご返事まで」

と大学ノートの破り取られた一枚の紙のご返事をいただき、ひどく感動した。様々な行き違いでお礼状を差し上げるのに手間取っている間に、この度のご訃報に接し、痛恨の思いは一入であった。そして、その短いご批評のうちに、奇しくも、晩年のニューマンの倂と、先生のお姿とを二重写しに眼前に見る思いがした。

ニューマンは第一バチカン公会議当時、学問の自由についての固い信念と、当時の教皇への恭順のジレンマの中で、あくまで教会に忠誠を守り通した人であった。島先生の「開かれた教会」への服従とのお言葉の中には、戦時中の日本の軍部の圧制によって如何に多くの大学が学問の自由を守るために多くの犠牲を強いられたか、多

数の学者、教授が講壇から追われ、研究者、学生たちも
無法な官憲の圧迫によって苦しめられたか、その苦しみ
のご経験と、第二バチカン会議以前の、閉じられた教
会の中で、一世紀前にニューマンが学問の自由を守るた
めに闘いながらも教皇への恭順を忘れることなかつた
彼の苦衷を、「第二バチカン会議の開かれた教会、即
ち、神への正しい服従と学問の自由とが両立でき
いみじくも表現なされたことに心を打たれた。

* 島芳夫（1969-1972年まで本学教授）

* 「カーディナル・ニューマン『ノーフォーク公に宛てた書翰』
をめぐって—グラドストンとの論争の周辺—」

**あらためて
本学における「キリスト教ヒューマニズム」
という用語の出現＝1967(昭和42)年**

「建学の精神 今と昔」 学長 内山八寿子
『清泉女子大学学生新聞』 第40号 1972(昭和47)年11月7日

近代日本の先覚者を創立者とし長い伝統を誇る有名私立大学ではそれぞれ独自の教育理念を揚げた「建学の精神」がその教育のバックボーンになっているのは周知の事実であるが、そのような大学においても、マスプロ化したキャンパスに学ぶ大多数の学生にとっては、その「建学の精神」が全く無縁のものになりつつあると嘆かれています。

戦後、新制大学としてはじめて発足した、比較的歴史の浅い本学の事情はこれと多少異なる。在学生総数が三百名前後で、教員と学生の比率が一对五にも充たず、少数教育に徹していた創立期には、殊更に建学の精神をあげつらうこともなく、教師と学生達は不文律の建学の精神を自づと体得していったのではないかと思う。

昭和三十七年の東京移転に伴い、その後、学生数が年々急速に増加するにつれて、建学の精神を全学生に徹底させる必要が次第に痛感させられるようになり、「キリスト教的世界観に立ち、高い知性と豊かな教養をそなえ、奉仕的精神に富む女性を養成する」と学則第一条に明記されている本学創立の目的と、「神のみ前に、清く、正しく、愛深く」との清泉の教育のモットーをあわせて解説した、「建学の精神」と題するパンフレットを新入生に配布するようになったのは、昭和四十二年のことであったと記憶する。

しかし、当時の在學生には、印刷された「建学の精神に頼らず、卒業生や上級生から継承された伝統的な清泉女子大生のスピリットを身を以て生きていた人々が多くいて、新入生に少なからぬ感化を与えたようである。

その後につづく二、三年は、全国的に多くの大学を襲った学園紛争の余波は本学にも及び、紛争こそ免れたとはいえ、教師と学生、上級生と下級生との間に、かつて存在しなかった断絶感が生まれ伝統的な建学の精神の継承も断ちきられたようにみえた。

だがそれは、伝統的な建学の精神に新しい光をあて、時代に適応する新しい解釈を試みる摂理的な機会でもあった。

なぜなら、キリスト教ヒューマニズムに基く人格形成を施し、正しい人生観と奉仕約な精神の持ち主を社会におくるという建学の根本的な精神は不変であっても、その具体化である実際的な教育方針は時代の変遷や状況の変化に応じて変わり得るし、変わらねばならないものだからである。

「ゆりかごを動かす手は世界を動かす」との確信に基いて、すぐれた家庭婦人を育成することに大きな社会的意義を認めた創立期の教育方針も、キリストの教えた人類愛、人間の社会的連帯性の自覚に基いて、万人の幸福を願い、理想的な社会の実現のため積極的な協力をなすべき使命を強調した近年のそれも、何れも同一の建学の精神の時代に応じた異った適用に他ならなかった。

さて、この建学の精神が、現在清泉に学ぶ若い人々のうちにどのように活かされるべきか、これがいま、全学生に与えられている大きな課題である。

学生のひとりひとりが、自己中心の狭い視野から抜け出て、ひとたび広く眼を世界に向けるならば、過度の物質文化と技術文明の支配の下に呻吟する人類の苦悩が眼に映ずることであろう。この世界の解放のため、清泉女子大生が寄与する道はないであろうか、新しい時のしるしを鋭敏に把握するという、青年にだけゆるされた特権を正しく行使して、理想の社会の建設のために協力することができるのは、人格をばすべての価値に優先させて尊重する、キリスト教ヒューマニズムの精神に生きる人々ではなかろうか。

Sr.内山の思い出

学報『おとずれ』第178号特集（2002年3月15日）

* 日米安保条約を発起点とした学園紛争激化の時
学生たちの激しい問題提起に動揺する大学関係者の中にあって、
「恐れてはなりません」と（Sr.栗山に）言い、全学生を集めて
「大学の理念と建学の精神」について明確に毅然とした態度で説得
した。

幸い本学は学生運動の危機をのりきることが出来た。

しかし日本の大学の現状を見ますと、少数の私立大学を除いて、果して、学問上の中立性が保たれているか、首をかしげざるを得ません。一流の国立大学の多くの講座が偏向した教授達に占められていて、そこに学ぶ青年達が唯物史観を金科玉条として行動の原理にしているのですから……。

また清泉のようなカレッジでは問題の視点は少し違います。

(略) もちろん、大学であるからには、学問を通じての教育であることは言うまでもありませんが、社会に奉仕する教養ある女性をつくることが目的ですから、日本の旧制以来の多くの大学が専門的学術研究を中心的使命とする、ドイツの総合大学の伝統を引いているのに対して、人間形成に重点をおく、英米のリベラル・アーツ・カレッジの性格を持つものと言えましょう。

* 学生からは一見近寄り難い凛としたまた毅然とした、しかしそれでいて、じつは大変優しいシスターであったという。p.3

* 学生にとって内山は多少近づき難い存在ではあった (Sr.栗山)p.2

* シスター内山は学問に対する姿勢はもとより、女子の高等教育に対する使命感が非常に強かったことから、清泉女子大学の存在理念を徹底的に追い求め、実践しようとする態度を崩そうとはしなかった。そのため、多くの方々との衝突も多かったし、私も例外ではなかった。(宮代源司氏)p.4

しかし、それらはどこまでも教育への強い情熱と学生への温かい愛情があったからこそなのである。

聖心侍女修道会を母体としている清泉関係の諸学校から大学のみを独立法人にしようと提案し、実行したのがシスターであったと記憶している。p.4

「大学の理念と建学の精神」

学報『おとずれ』臨時号（1969年12月12日）内山八寿子

学生B ……この大学では無神論、マルクス経済学の講義もありません。すべての学科がキリスト教的に偏向していると思います。大学である以上、あらゆる思想に一様に開かれていねければなりません。

学長 たしかにキリスト教大学であっても、専門的な研究のレベルでは、あらゆる学説に対して、少しの制限もないことは当然でしょう。もしこの大学に経済学部があって、マルクス経済学の講義がないとしたら、また哲学専攻の大学院生にサルトルの研究が禁じられるとしたら、大学という制度と矛盾いたします。

(略)

……したがって、この大学では、学生にそれぞれの専門的教養を身につけさせることだけに甘んぜず、各自が人生の根本的な問題、つまり人間自らの根拠や意味を問うことに、眼を向ける機会を提供することに意を払っています。凡そ、大学とは、真に普遍なるものを統一原理としなければならないとするならば、「そもそも実在するものの根源的な統一的総体」に眼をなげかけ存在するそのものを問うという、形而上学的な問いかけを可能にする、精神的土壌が用意されねばなりません。そして「キリスト教主義大学においては、この問題に対する問いかけとその解決の方向づけをなすものとしてキリスト教が存在している」ことは前に述べた通りです。そのために、一般教育の課目にキリスト教的な色彩の強いものが多いことは、別に怪しむに足りません。

学生A しかし、それならば、大学における「学問の自由」に抵触するのではありませんか。特にカトリック大学では禁書など、いろいろ制限が多くて……。

学長 たしかにカトリック教会は過去において、この点について、特別な考え方をしていました。しかし、第二ヴァチカン公会議以後は、この点でもずいぶん変わりましたし、また前世紀においても、既に神学生ではなく、一般の学生を対象とするカトリック大学に於いては、カーデナル・ニューマンは、リベラル・アーツを教授する大学において、文学や科学の教授や研究の自由が制限されてはならないと言って居ります。当時の自然科学研究は、現代の思想研究と同様に、教会内の保守派には危険視されていたようですから、ニューマンの、この見解は、現代の大学における「学問の自由」に、そのまま適用することができると思います。

学生C たしかに、この大学でも専門的な学科目では、その点で少しの制限も感じられないという事実は認めます。キリスト教文化学科は少しちがうようですが……

学長 キリスト教文化学科は西洋文化の正しい受容のために、その基盤であるキリスト教の知識と理解が必要であるとして、文化的の新しいヴィジョンで設けられた、いわゆるリベラ・アーツの性格を多分に持った学科です。

この辺でそろそろ大学の理念と私どもの「建学の精神」との関連についての話をまとめることにしましょう。

まず、第一に、清泉女子大学は総合大学（ユニバーシティ）ではなく、文学部を唯一の学部として大学院を持たない単一学部大学（カレッジ）であることを認識しましょう。

従って高度の学問研究を主な使命として大学院までつづく総合大学の理念をそのままこの大学にあてはめることはできないということです。

パーキンス博士も「われわれは総合大学の学部教育も四年制のリベラル・アーツ・カレッジの教育もまるまる全く同じものであるかの如く扱って、かえって大学問題の解決を複雑にしてしまった」と言っておられます。

この大学も、四つの専門学科にわかれています。専門研究を重視する総合大学とはちがひ、学生がそれぞれの専門課程を学びながら、教養ある女性として形成されるように、教育に重点をおく、リベラル・アーツ・カレッジの性格が強い大学です。

学生A しかし私どもは国文学とか、英文学とか、又スペイン語は英語などの語学を学ぶつもりでこの大学に入りました。ですから、もし専門的な学力が身につかなければ、自他ともに期待が裏切られることになります。

学長 学部だけの大学としては、どの専門についても、この大学ではみなさんがまじめに勉強さえすれば、それぞれ、ひとかどの専門的な教養が身につくように配慮してあります。

しかし、同時に、良心的な教授と、きびしい学習を通じて、知的誠実さや寛容、客観的な冷静な判断力などの、学問的価値を体得し、自己の人格的主体性の確立によって、社会の向上のために貢献することが望まれているのです。とりわけキリスト教大学として、ここで学ぶ人々が、自らの人間存在の根拠を徹底的に問いかけつつ、やがて世界の根元的な意味にまで思い至ることこそ、この学園が、たとい総合大学(ユニバーシティ)でなくても、専門学校ではなく、カレッジ大学であるために、目ざさねばならないことなのです。普遍的な真理探究の場を大学と呼ぶのであれば……。

ポイント4

内山八寿子はJ・H・ニューマンの研究者であり、学園紛争が日本全国の大学で激化していく60年代後半、ニューマンの大学論を援用しつつ、学生たちとの対話を通して、「キリスト教ヒューマニズム」という明確な言葉で本学の建学の精神を伝えた最初の聖心侍女修道女であった。

まとめ

清泉女子大学の建学の精神は1967年4月、内山八寿子第3代学長の時に「キリスト教ヒューマニズム」という明確な表現を得て使用されることとなったが、その背景には、J・H・ニューマンの『大学の理念』に見られるリベラル・アーツとしての大学観が大きな理論的根拠の一つとしてあったと考えられる。

またその先達として、本学の初代理事長であった田中耕太郎の存在、およびその大学観についても、ニューマンとの関連から、あらためて注目されてよいのではないか。

FIN